

2025年

風光れ

人権のたより 通算第76号 2月12日発行

三重県立津東高等学校

梅の花のつぼみも膨らみはじめ・・・とはいうものの、まだまだ寒い日が続きます。

○ おもしろきこともなき世をおもしろく



諱（いみな）は「春風（はるかぜ）」、字（あざな）は「暢夫（ちょうふ）」。

結核により27歳で早逝した動乱の幕末を駆け抜けた攘夷志士の一人、高杉晋作。彼の辞世の歌としてよく知られているのが「おもしろきこともなき世をおもしろく」。司馬遼太郎の小説、「竜馬がゆく」では、野村望東尼がこの上の句に続いて、「住みなすものは心なりけり」と詠み、高杉晋作が「面白いのう。」と答えて永眠する、という流れになっています。

（なお、この歌は辞世の歌ではないという説もあります。）

さて、高杉晋作と言えばこの歌だけでなく「奇兵隊」を連想する人も多いのではないのでしょうか。この「奇兵隊」とは「正規兵」つまり武士階級だけからなる部隊ではなく、当時のあらゆる身分の人々の「混成部隊」のことを指します。

「おもしろきこともなき世をおもしろく」するために、「奇兵隊」の人員を身分や出自ではなく、その人の志や能力を見て起用し重用する。「住みなすものはこころなりけり」そのようにしたのは自分の心次第。このように解釈すると彼は当時としては人権という面においても先進的で画期的な人物だったように思えてきます。

*イラストは「イラスト本舗」より <https://irasutofree.com/>

○ 国際母語デー（2月21日） ～言語と文化の多様性～

言葉を守り文化を守る。東パキスタン（現バングラディッシュ）の若者たちは自分たちの母語、ベンガル語（バングラ）を守るため、ウルドゥー語のみを「国語」としようとするパキスタンに対し立ち上がりました。そのような若者や住人が行うデモと警察隊がぶつかり多くの死傷者が出たのが1952年2月21日のことです。（これに因んで1999年、UNESCOによって2月21日が「国際母語デー」に制定されました。）

では、なぜ若者たちは命をかけてまで自分たちの母語を守ろうとしたのでしょうか。それは使っている「言葉」が単なる情報伝達手段ということだけでなく、前述の通り、その文化と密接にかかわり、また自分たちが自分たちである、自分たちの存在を証明するものに他ならないからです。2024年現在、世界の人口は約81億1900万人、そして、その人々によって7,164種類の言語が使用されているものの、その約44%の3,170の言語が今、消失の危機にあるといえます。（<https://www.ethnologue.com/>）

言語が消失（話者がいなくなる）、ということは、その文化も失われてしまうということです。これらの消失危機にある言語を守るために、様々な取り組みがなされています。

